

# 斜縁神獣鏡の系譜

## — 考古学的手法と字形分析を中心に —

馬淵 一輝

### はじめに

斜縁神獣鏡とは、2世紀末～3世紀前半に中国の華北東部地域で作られたといわれている銅鏡である。この鏡は知らずとも、よく似た名前の三角縁神獣鏡を耳にしたことがある人は多いだろう。実際に、神獣の表現や配置、縁の断面形状が似ていることから、混同されてきた経緯がある。現在の研究では両者は区別されているが、斜縁神獣鏡は三角縁神獣鏡と関連する重要な鏡といえる。

斜縁神獣鏡をはじめ、後漢・三国時代に作られた神獣鏡は、「吾作」から始まる銘文をもつことが多い。「吾作るに（私が作った）」という意味だが、「吾」とはいったい誰なのか、これまでの鏡研究で議論されることはなかった。しかし、銘文のもつ情報（字の書き癖、よく使う語句など）から、誰かを特定できないか。鏡以外の研究を参照すると筆跡に注目した研究がある。筆跡は時代を通じて個人の特定に用いられてきた経緯があり、犯罪捜査で筆跡鑑定がおこなわれているシーンなどを思い浮かべる人も多いだろう。それを鏡研究に応用できないか。「吾作」が誰かわかれば、数ある神獣鏡の製作時期・地域・動向などを知る手がかりとなりうる。

ちょうど、昨秋開催された第126回展覧は「漢字」をテーマにした企画展であり、漢字の成り立ちについて考える機会があった。斜縁神獣鏡を題材に、まずは考古学のオーソドックスな方法を踏まえたうえで、そこに文字の検討をプラスするとなにがいえるのか検討してみたい。文字を考古学的な研究にとり入れてみようという一つの試みである。

### 一 斜縁神獣鏡の研究史

斜縁神獣鏡と三角縁神獣鏡<sup>(1)</sup> 斜縁神獣鏡は総数50面ほどしか知られていない、数量の少ない鏡である。古くは、三角縁神獣鏡に含まれることもあったが〔富岡1920など〕、樋口隆康によって「斜縁二神二獣鏡」として後漢鏡の一つに位置づけられた〔樋口1979〕。三角縁神獣鏡の面径は20cmを越える大型品が多いものの、斜縁神獣鏡は16～12cmの小さな製品が多い。三角縁神獣鏡にはない「幽涑三商」を用いた銘文をとっている。縁は三角縁より低く、平縁よりは盛り上がり、中間型式として斜縁（半三角縁）と呼ぶ。これらが斜縁神獣鏡の定義とされ、三角縁神獣鏡と区別された。

一つの鏡式とされた以後も、三角縁神獣鏡との関連が注目され、その登場前、もしくは並行する時期に位置づけられた〔岡村1999、福永2005など〕。なかでも、福永伸哉の指摘する外周突線（外区の最外周をめぐる突線）は、ほとんどの斜縁神獣鏡に採用され、魏の方格規矩鏡や古い三角縁神獣鏡に引き継がれる〔福永2005〕。

製作地と関連鏡 製作地については、岡村秀典が上方作系獣帯鏡などと同じ徐州系統の鏡と推察し [岡村 1999 など]、上野祥史は自身が分類した環状乳神獣鏡の一部（Ⅱ C 式）や劉氏系画像鏡などの華北東部系の鏡とも関係があると指摘するなど [上野 2006]、徐州地域（華北東部地域）で製作されたと考えられるようになった。加えて、森下章司が指摘する同じ徐州系統の画紋帯同向式神獣鏡との共通点も興味深い [森下 2011]。両者は鈕を隔てて対置する西王母と東王父のラインを軸として、鈕孔方向や銘文の開始位置が統一されている。単なる見た目の類似ではなく、意識しなければ気付かないような製作原理が共通している点に、製作時期や製作者集団の緊密さがあらわれている。

徐州地域で作られた鏡は、山東省南部・江蘇省北部の地域（現在の徐州市周辺）から出土するだけでなく、朝鮮半島北部の楽浪郡故地や日本列島の前期古墳からの出土が多いという特色がある。斜縁神獣鏡もピョンヤン周辺から複数出土しており、徐州地域と楽浪・倭が結びついたことで、卑弥呼と公孫氏政権の交流によってもたらされたという見方もある [実盛 2012]。

斜縁神獣鏡の製作系統・時期 断面形状と銘文型式などをもとに複数の製作系統の存在が指摘されている [村松 2004・森下 2011]。はっきりと違いを認識できる製作系統は、四言句の銘文<sup>(2)</sup> Sc をもつグループと、七言句の銘文 Pb をもつグループの二つである。前者は鈕が半球形で複線波紋の屈曲を密にし、後者と一部の銘文 S をもつものは、鈕が扁平で複線波紋の屈曲が緩い特徴が一致するといわれている。

「幽凍三商」などの語句を用いる四言句の銘文は、後漢中期ごろに四川地域で発生した神獣鏡（廣漢派）に由来し、七言句の銘文は画像鏡、とくに後漢代に淮河流域で活動していた淮派に由来すると考えられている [岡村 2017]。したがって、この差は出自の異なる工人の特徴が鏡にも表れた結果と考えられ、総数の少ない鏡ではあるが、少なくとも二つの製作者集団によって作られたと推測できる。

具体的な製作時期については見解が一致しておらず、後漢末とみるか魏初頭の製作とみるかに分かれる [馬淵 2019]。最新の研究を挙げると、岩本崇が銘文 Sc のグループを半截菱雲紋をもつ画紋帯同向式神獣鏡と、銘文 Pb のグループを画紋帯求心式神獣鏡と結びつけ、製作の盛期を 3 世紀第 2 四半期頃と推定している [岩本 2020]。

本論の指針 現状で明らかにされている斜縁神獣鏡の研究を簡単に整理した。名前の通り、重要な鏡だと疑いないが、肝心の製作時期がよくわかっていない。結論からいえば本論でも断案することは難しいが、製作「系統」について検討を深め、他鏡式と比較した斜縁神獣鏡の相對年代を探ってみたい。そのための指針を以下に示す。

第一に、鏡の断面形状と銘文型式に着目し、考古学的な視点から系統差を示す。これまで斜縁神獣鏡に二つのグループがあると想定されてきたものの、様々な属性をまとめた集成表の提示のみで済まされ、具体的な図面が提示されてこなかった。その表に記された属性にも少なからず間違いを認める。そのために、系統差が「あるらしい」とは認識されつつも、不確かさが残っていた。まずは、鏡研究には欠かせない断面図を提示し、視覚的に明確にする。

第二に、文字のかたちに着目し、斜縁神獣鏡と他鏡式の字形を比較したい。想定されている

系統差が何に起因するかを考察するためである。これまで、工人の出自は銘文型式に求められてきたが、銘文型式や特徴的な語句の有効性に対しても疑問がある。そこで、鏡式を越えて共通する文字のかたちに着目することで、個々の工人を意識した分析をおこない、系統差を明確なものにしたい。

## 二 断面形状と銘文型式による斜縁神獸鏡の分類

斜縁神獸鏡の大別 既に指摘されている銘文型式とそのほかの情報の対応関係について、改めて整理する（図1）。

Sc 系統：四言句の銘文 Sc に代表される一群を Sc 系統とする。この一群は鈕の断面形状が半球形のもものがほとんどで、鈕頂が縁頂部よりも高く突出する。比較的厚手の縁をもち、縁の上面がほとんど平滑で平縁に近いものが多いが、反りの強い匙縁のものも若干存在する。波紋の屈曲が強く鋭角に近い複線波紋をもつ。斜縁神獸鏡の大多数を占める。（図2-1～4）

Pb 系統：七言句の銘文 Pb に代表される一群を Pb 系統とする。銘文 S を短くしたような型式（以下、S 短と呼ぶ）も含まれる。ボタンのような扁平鈕をもち、鈕頂と縁頂部の高さが同じぐらいで、鈕の高さが低い。Sc 系統と比較すると薄手の縁であり、反りの強い匙縁に限られる。波紋の屈曲が緩い鈍角に近い複線波紋をもつ。少数派ではあるが無視できない数量であり、神獸表現を比較しても Sc 系統とは趣が異なる。（図2-5・6）

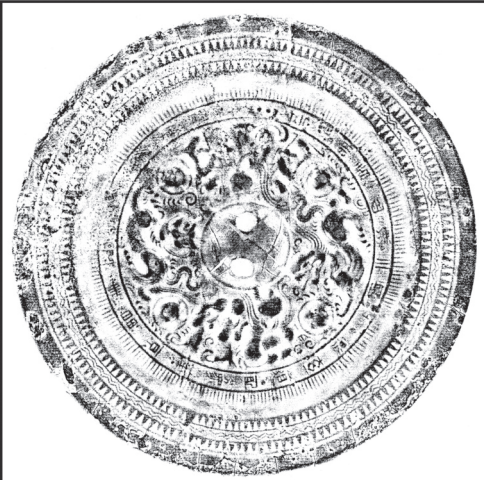
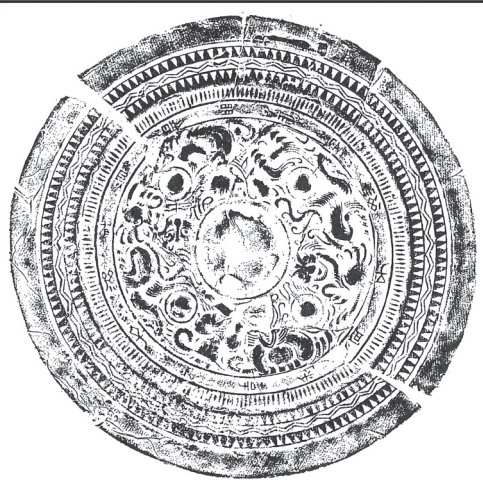
		
系統	Sc 系統	Pb 系統
銘文	四言句 S	七言句 Pd + S 短
鈕の断面形状	半球	扁平
縁の断面形状	厚く平滑	薄く反りが強い
複線波紋	狭い	広い

図1 斜縁神獸鏡の大別

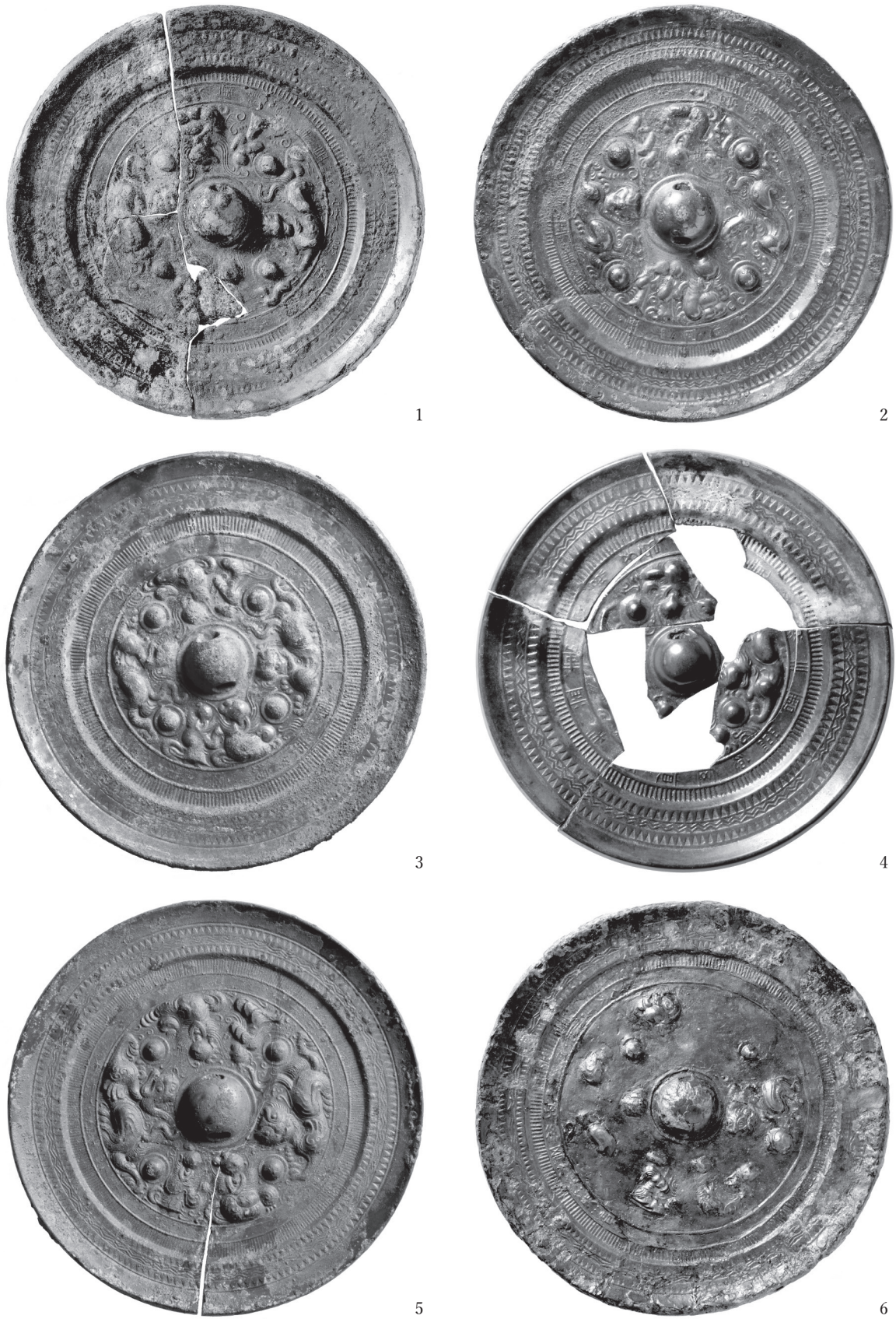


図2 斜縁神獸鏡の諸例 (Sc系統 1:愛媛朝日谷1号墳 2:静岡庚申塚古墳 3:大分免ヶ平古墳第2主体  
4:山梨小平沢古墳 Pb系統 5:大分免ヶ平古墳第1主体 6:徳島天河別神社4号墳)

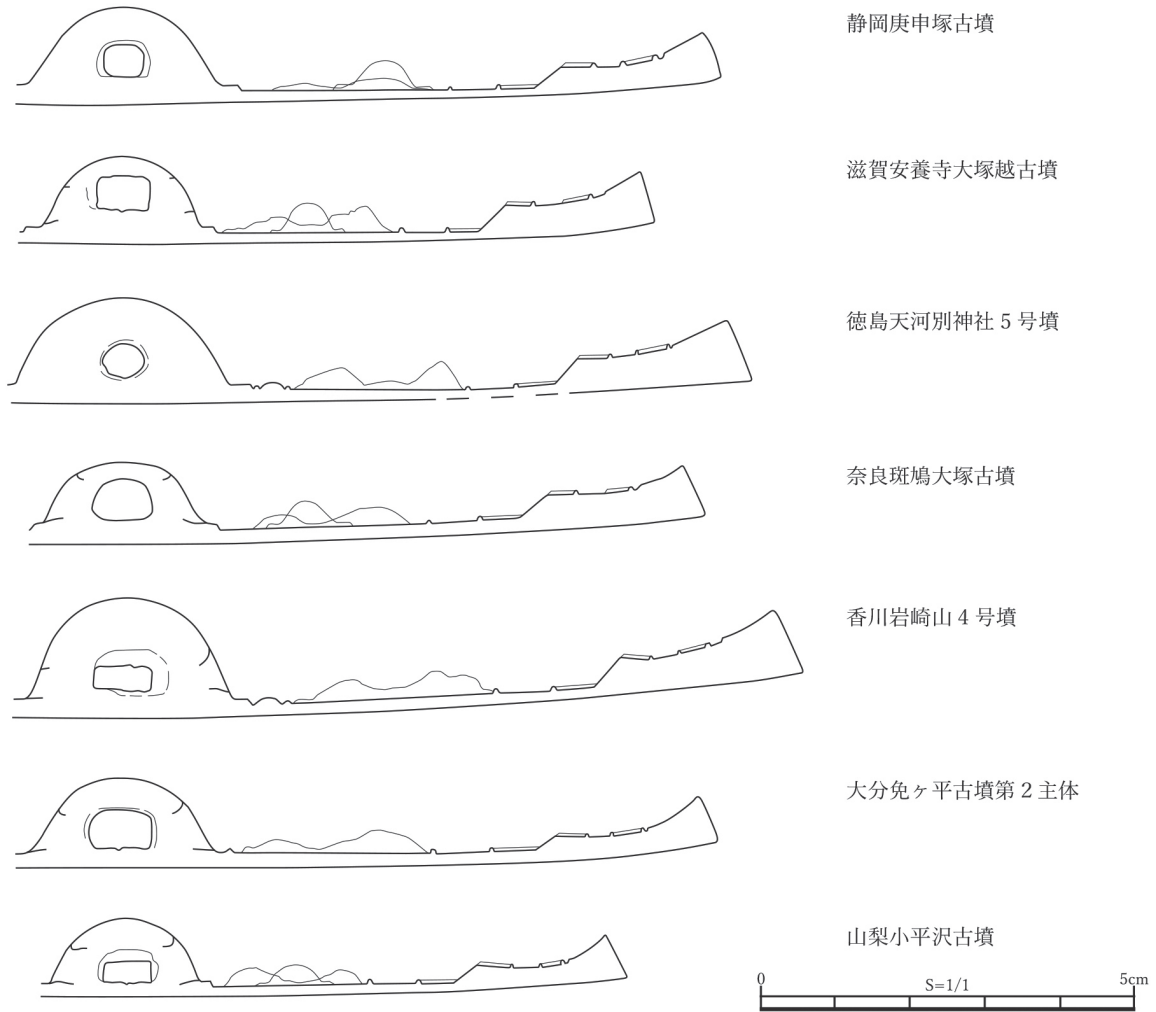


図3 Sc系統の断面形状

注意しておきたいのは、ここで分類した各系統の特徴は厳密に区別できるわけでは無い。例えば、兵庫へボソ塚古墳出土鏡は扁平鈕だが銘文 Sc をもつように、この 2 系統は近い関係で鏡を製作していたと予測できる。ただし、系統を隔てる強い差として複線波紋の粗密の違いがあり、この属性が両系統で交わることはない [村松 2004]。

ほかにも七言句の銘文 Pd や斜縁四獣鏡を含めると、新たなグループを設定できる可能性はあるが、先の 2 系統ほど強いまとまりを示さないため、ひとまず置いておく。

**Sc 系統の実相** Sc 系統の鈕は半球形とまとめたが、鏡体から突出する逆 U 字形の鈕、大型で山高の鈕、斜面の傾斜が緩いお椀形の鈕など、実際には複数種類が存在するようである (図 3)。縁の厚さは 2.5mm ~ 9mm で、4mm 前後の厚手の縁が多い。紋様のない縁上面 (鏡背の最も外側) の突出と反りが弱く、斜縁と言うよりも平縁に近い例が多い。わずかに Pb 系統で見られる匙状の縁が存在する。

銘文を見ると「吾作明鏡 幽凍三商 統徳序道 配象萬疆 曾年益壽 子孫番昌」の銘文 Sc を基本形とし、面径の小さな鏡では「配象萬疆」を省略する例が多い。一方で奈良古市方形墳出土鏡の「功

表1 Sc系統の銘文一覧

地域	遺跡等	径	銘文							
奈良	古市方形墳	16.8	吾作明竟	幽練三商	□□序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌	功成事見	其師命長
奈良	タニグチ1号墳	18.2	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌	樂未央	
愛媛	朝日谷2号墳	15.2	・ ・ ・	・ ・ ・	統德序道	配象萬疆	曾年益□	子孫番昌	樂未央	
(大阪)	石切神社蔵	15.6	□作明竟	幽練三商	統德序□	配象萬疆		子孫□昌	冝□王□	
京都	稲荷山三ノ峯古墳	15.6	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	□年益壽	子孫□□		
静岡	庚申塚古墳	16.2	吾作明竟	幽練三商	□德序道	配象萬京	曾年益壽	子孫番昌兮		
滋賀	安養寺大塚越古墳	14.3	吾□□□	□□□□	統德序道	配象萬疆		子孫番昌		
兵庫	へボソ塚古墳	15.2	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌		
(岡山)	伝木ノ子町	17.0	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌兮		
広島	石槌山1号墳第1主体	15.8	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌		
—	五島美術館蔵 M302	17.4	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌兮		
兵庫	松田山古墳	15.5	吾作明竟	幽練□□	統德序道	配□□□	曾年益壽	□孫番□兮		
長野	(兼清塚古墳)	15.9	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌		
北朝鮮	大同江面 1314	15.6	吾作明竟	幽練・ ・	・ ・ ・	配象萬疆	曾年益壽	子孫番昌		
大阪	津堂城山古墳	17.9	□□□竟	幽練三商	□□□□	配象萬疆	曾□□□	□□		
香川	岩崎山4号墳	17.9	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	冝子		
徳島	天河別神社5号墳	16.5	・ ・ ・	□涑□□	□□□道	□象萬疆	□年・ ・			
奈良	佐味田宝塚古墳 M17	14.6	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益	孫子		
北朝鮮	大同江面 1313	14.2	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆	曾年益壽	冝子		
—	小校 15—236	—	吾作明竟	幽練三商	□□序道	配象萬疆	曾年益壽	子孫		
(浙江)	巖窟 2下—1	14.5	吾作明竟	幽練三商	統德序道	配象萬疆		冝孫子		
(大阪)	石切神社蔵	14.5	吾□明竟	幽練三□	□德序道		曾□□□	冝子		
滋賀	安養寺山ノ上古墳	18.0	吾作明竟	幽練三商	統德序道		曾年益壽	子		
大分	免ヶ平古墳第2主体	15.8	□□明竟	幽練三商	統德序道		曾年益	孫子		
(福岡)	伝筑前	15.6	□□明竟	幽練三商	統德序道		曾年益	子		
奈良	斑鳩大塚古墳	15.3	□□明竟	幽練三商	統□序道		曾年益	吉冝□		
(京都)	伝長岡近郊	14.2	吾・ ・ ・		・ ・ 序 ・		曾年益壽	子		
山梨	小平沢古墳	13.2	吾□□竟	幽練三商	統德序道		□年益壽	冝孫子		
福岡	五島山古墳	12.2	吾作明竟	幽練三□			曾年益壽	子孫番昌		

※兼清塚古墳出土鏡は踏み返しのため参考

表2 Pb系統の銘文一覧

地域	遺跡等	径	銘文							
大分	免ヶ平古墳第1主体	16.2	吾作・ ・ ・	・ 龍 ・ ・ ・	・ ・ ・ 孫□	作史高遷□□燹□	□男□女・ ・ ・ 子	師命長吉		
大阪	和泉黄金塚古墳	17.4	周是作竟自有紀	・ ・ ・	令人長命冝孫子	・ ・ ・	五男二女・ ・ ・	天王日月 子		
大阪	安満宮山古墳	16.0	吾作明竟自有己	青龍白虎居左有	令人長命冝孫子	作史高遷車生燹耳	作師長命吉			
鳥根	造山3号墳	15.5	吾作□竟自有紀		令人長命冝孫子	作史高遷車生燹耳	冝侯			
京都	金毘羅山古墳	15.7	吾作明竟自有紀		令人長命冝孫子	大吉				
(河南)	巖窟 2下—2	16.4	吾作明竟自有紀		令人長命冝孫子	大吉				
大阪	弁天山 C1 号墳	14.8	吾作明竟自有	孫子大吉利	冝子孫					
(大阪)	石切神社蔵	18.1	吾作明□自・ ・	子大吉						
徳島	天河別神社4号墳	16.2	吾作明竟	□見人大吉利	長・ ・ ・ 子孫					
奈良	佐味田宝塚古墳 M16	17.1	吾作明竟	幽練三商	□吉□□	高官□□侯	長冝子孫			
大阪	国分ヌク谷北古墳	15.9	□□明□	□□三□	□吉	□冝□孫	□冝□官			

※表1・2ともに・ ・ ・ は複数字欠損、□は1字欠損

成事見 其師命長」、奈良タニグチ1号墳・愛媛朝日谷2号墳出土鏡の「楽未央」、静岡庚申塚古墳出土鏡の「配像萬京」は、ほかの斜縁神獸鏡には見えない用例である。古市方形墳・タニグチ1号墳出土鏡は、ふつう「幽凜三商」とするところを「幽練三商」と表記しており、字体にも違いを認められる（表1）。

内区紋様を見ると、従者を一人ともなう東王父・西王母を対置し、残りの2区画に獸像を置いたものが定型化した表現に見える。しかしながら、先に挙げた特異な銘文をもつ一群は従者の数が多かったり、仙人の表現が片足を前方へ突き出す表現になったりしている。ほとんどの斜縁神獸鏡の神像は襟元から気が上方に伸びているが、タニグチ1号墳出土鏡は襟元近くの袖上に「山」字の縦画を増やした紋様をもつなど、神像の表現にも微細な差が認められる（図4）。したがって、特異な銘文と神像表現には対応関係があると予想できる。



図4 Sc系統の神獸表現の細部  
(1: 静岡庚申塚古墳 2: 奈良タニグチ1号墳)

**Pb系統の実相** Pb系統は低い鈕に限られ、鈕頂が平坦でボタンのような扁平鈕が多い。鈕座の段が上方に突出する。縁の厚さは2.5mm～7mmで、2.5mm前後の薄手の縁が多い。紋様のない縁上面の反りが強く、外区全体で匙面を呈するものが多い。例は少ないが、銘帯が断面蒲鉾形に盛り上がるものが存在する。両系統を比較すると、Pb系統の神獸像は高く突出する（図5）。

銘文を見てみると、七言句の銘文Pbが多いものの、四言句の銘文Sも存在している。しかし、Sc系統のような整った四言句の長文ではなく、ほとんど省略される。「大吉」の語句を挿入することが多い。Sc系統は銘文にまとまりがみられるが、Pb系統は用例の差が激しい（表2）。

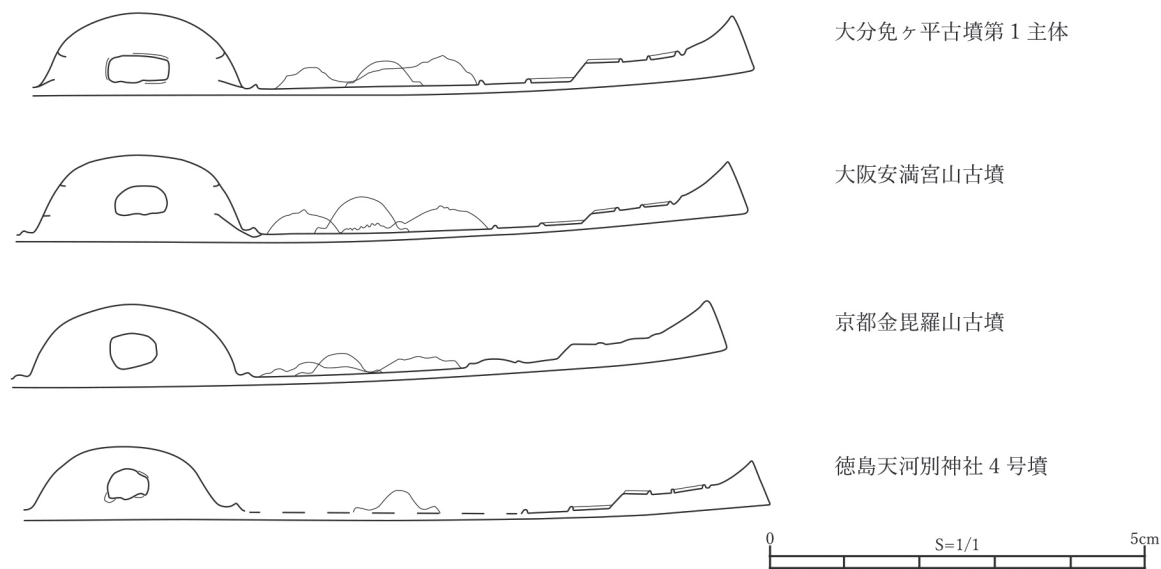


図5 Pb系統の断面形状



図6 上方作系獸帶鏡と断面形状 (S=1/2)  
(広島中小田1号墳)

内区紋様を見ると、銘文と同様に神獸表現にもばらつきがある。また、神像の気や獸像の牙など、極細の突線を用いて細部まで表現した製品もあり、彫りが深いこともあってか、Sc系統よりも精緻に造られた優品が多い印象を受ける。

断面形状の系譜 Sc系統とPb系統で鈕や縁の形状に違いがあることを確認できた。外区のもっとも内側が厚く、外区から縁にかけて緩い弧を呈するものがいくつみられ、後漢鏡の中では異例であるが、同じ徐州系に位置づけられる上方作系獸帶鏡や飛禽鏡にもみられ、関係性がうかがえる(図6)。徐州系鏡群の特徴といえよう。この形状はのちに、日本列島の倭鏡生産にも影響を与えたと考えられており[加藤2015]、徐州系鏡群が倭へ大量に流入していたとわかる。

対して、斜縁と言いつつも平縁に近いものが存在する。Sc系統の一部にもみられるが、検討から除外した斜縁四獸鏡に顕著である。斜縁四獸鏡の外区は厚く、内区と外区との段差が明瞭に認められ、断面形状も平縁に近い。「青蓋」銘が多く、縁の形状や製作地をふまえると、同様に「青蓋」銘の多い盤龍鏡の系譜をひくと考えられる。複線波紋が密であることも一致する。

銘文の系譜 Sc系統のうち、古市方形墳出土鏡のもつ「功成事見」は類例の少ない特徴句で、伝楽浪出土「翟氏作」獸帶鏡・湖北省鄂州市鄂鋼630工地出土「至氏作」画像鏡に同句が存在する(図7)。前者は異例ではあるが上方作系獸帶鏡に、後者は袁氏作系画像鏡に位置づけられ、ともに漢鏡



図7 銘文に「功成事見」をもつ鏡 (1:伝楽浪 2:湖北鄂州市630工地)



7期1段階<sup>(3)</sup>(2世紀中葉～後葉)に含まれる。斜縁神獸鏡よりも古い製作時期が想定されている。「楽未央」は漢代に広く用いられるが、鏡の銘文Sとともに使われる例は珍しい。「配象萬京」は画紋帯同向式神獸鏡に散見し、奈良ホケノ山古墳出土画紋帯同向式神獸鏡は銘文Sbで「幽涑三岡 配像世京」としており、「配象萬疆」の「疆」の仮借とされる〔「中国古鏡の研究」班 2011a〕。

Pb系統の語句「・・・自有紀」「令人・・・」は漢鏡五期(1世紀後半)の淮派の画像鏡に始まるといわれており、蒲鉾型の銘帯も銘文Pbをもつ神人歌舞画像鏡に由来すると考えられている〔森下 2011〕。「自有紀」は多くの鏡にみられるものの、続く語句は多様であり、「令人長命亘孫子」とセット関係にあることが斜縁神獸鏡の銘文の特徴と考えられる。

なお、大阪和泉黄金塚古墳出土鏡は「周是」の作鏡者名をもつ。浙江省出土鏡にみられる「呉向里周是作」などと共通するが、製作年代や鏡の紋様が大きく異なっており、同一人物とは考え難い。S短のうち「大吉」はどこにでもある用例であるが、「劉氏」系画像鏡・神獸鏡に多く、環状乳神獸鏡の分類で「大吉」系が設定されており〔村瀬 2016〕、それらの一群との関係を想定できる。

**小結** 先行研究を追認する結果となったが、断面図と銘文一覧を提示することで、両者の対応関係を明快にし、視覚的に複数系統の存在を確認できた。鈕の形状や複線波紋のピッチなど、ほかの属性もある程度のまとまりを示す。総数の少ない鏡式ではあるが、少なくとも2系統に分かれることには疑いはない。さらに、数量の多いSc系統は銘文型式と神仙表現との対応関係も認められ、細分できる可能性がある。

断面と銘文の検討で他鏡式との影響関係を想定したが、断面形状や紋様の全く異なる鏡どうしを考古学的方法のみで比較するには限界がある。そこで、次章では文字をとりあげ、他鏡式との比較を中心に斜縁神獸鏡の系譜を追っていきたい。

### 三 文字からみた斜縁神獸鏡

考古学的な研究方法、すなわち断面形状や銘文型式から見出した系統差は何に由来するのだろうか。この疑問を解決するためには、冒頭で述べたように「文字」が有効だと考える。鏡どうしを比較する場合、「西王母」や「青龍」など同じ紋様を比べる方法が一般的であるが、紋様が異なる鏡式である場合、比較が困難になってしまう。そもそも斜縁神獸鏡の神獸像は青龍や白虎を区別しているかもあやしい。その点、文字であれば銘文の一字一字は鏡式に左右されることが少なく、銘文中に同じ文字を使用してさえいけば、鏡式を横断して比較できることが大きな強みといえる。

#### (1) 考古学的な文字研究

**「字形」の定義** 前章で用いた「銘文型式」は、銘文の内容、使用される語句・語順によって設定されており、文字自体の情報は問わない。文字そのものに注目する概念に「字形」があり、大西克也によって定義されている〔大西 2009〕。定義を改めて提示しておきたい。

「字形」：字のかたちを指す。筆画の太さや細さ、丸いか四角いか、縦長か横長かなど、個人  
の書き癖やその場限りの微細なかたちの違い。

「字体」：文字の規格を議論するときに使う用語。筆画の多寡や画数の違いなど、字体の異なる複数の字は「異体字」と呼ぶ。

「書体」：ある一つの体系としての文字のデザインを指す。楷書体・隸書体・篆書体など。それぞれの書体には、楷書体に対する明朝体のように派生的な書体が存在する。

大西が字形を「個人の書き癖」とするよう、筆者も個人を示す指標と考える。しかし、次に述べるように、文字による個人の特定の難しさも事実であり、適宜、字形と組み合わせほかの特徴を見つけることで補っていききたい。

また、紋様を彫る人と銘文を彫る人が異なる分業体制であった可能性もある。しかし、後漢後期の神獸鏡においては工人名や字形と紋様表現とが一致することを確認しており〔馬淵 2019〕、後漢鏡の紋様と銘文は同一工人が施したものとみなして論を進める。

字形と筆跡　字形に似た概念に筆跡がある。明確に定義されているわけではないが、「筆跡」とは「文字を形づくることを目的として、筆記用具を動かした跡」といわれる〔魚住 2007・110 頁〕。そこには文字一字だけではなく、筆順や字の間隔、文字と文字列の傾きなど、様々な情報が含まれる。筆跡鑑定は裁判等において、ある程度の有効性が認められているものの、実は、筆跡による個人の特定自体は非常に難しいと考えられている。文字は書き手の年齢、執筆状況、精神状態など様々な要因によって変化し、極論をいえば全く同じ筆跡は存在しないといえる。また、運筆を見極めるためには実見や高精細画像の利用が不可欠であり、さらに鋳物の場合は彫りの深さや工具の先端形状も考慮に入れる必要がある。

字形は筆跡のもつ情報の一部に過ぎない。字形の比較は「筆跡異同鑑定」と呼ばれ、筆跡鑑定の基本とされているが、ほかにも様々な情報を踏まえて筆跡の一致を探し、そこで初めて個人まで特定できる。写真による字形の比較のみに基づいた判断には不安が残るため、字形比較以外に欠けている筆跡鑑定の条件を補う必要がある。そこで、紋様表現や断面形状など考古学的な視点が有効となるだろう。本章は考古学的研究から導かれた「系統」を狭める試みである。

考古学における文字研究の事例　考古学的な論文で文字を主軸に検討したものには以下の研究がある。

崎川隆は甲骨文字を対象に字形を分類しており、字形をもとに一つの文字に複数の型式を設定することで、考古学的な検討を加えた先駆的な研究である。崎川の定義では「筆跡」の用語に個人の書き癖を求めているが、分析内容自体は先に定義した字形の比較である。ただし、文字のバランスや画の交差角度等も含めた分類案を示しており、「筆跡鑑定」の手法を意識している〔崎川 2002〕。

鈴木舞は殷代の青銅器を対象に研究を進めており、複数の文字を検討している。例えば、殷墟花東 54 号墓出土の一括資料のうち、「長」は 4 種類に分類でき、それぞれ銘文を施した器物の器種・器形・紋様と対応関係にあると述べる。分類できた要因は銘文に見本があったと想定している。容器では同一器物の蓋と器で明らかに異なる字形を選択する例があり、武器では字体・字形が統一されているため、武器制作工房は紋様・銘文を一つのラインで製作し、容器制作工房は施紋担当・銘文担当が分かれていたと復元する〔鈴木 2015a〕。別に、同時期の有銘青銅武器の集成をおこない、

一括資料に限定される特殊な状況ではないことを確認している [鈴木 2015b]。

本論と同じく銅鏡をみつかった研究では、岡村秀典が前漢鏡を対象に字形の変化を指摘をする [岡村 1984]。一つ一つの文字に型式を設定するのではなく、銘文全体の字形に対して型式を設定しており、字形の篆体から隸体への変化を指摘するなど、書体への意識が強い。

近年では、雨宮健祥が三角縁神獸鏡の字形を検討しており、膨大な研究がある鏡式に切り込んだ意欲的な研究といえよう。基本的には鈴木と同じ字形に着目した方法ではあるが、より踏み込んで個々の工人を特定しようとした点が特筆される。銘文のある三角縁神獸鏡のうち「作」の字形に着目し、ほかの器物にある「作」の隸書・楷書と比較し年代の指標としている。「吾」「氏」「鏡」「有」「子」などを字形によって分類し、同じ「字形タイプ」をとる製品は、紋様の選択や神獸表現にも共通性が見えることから、複数の工人を見出している [雨宮 2019]。

漢字以外の研究にもふれておきたい。内記理は古代パキスタン・アフガニスタンで用いられた、カロシュティー文字の編年をおこなった<sup>(6)</sup> [内記 2020]。古い字形と新しい字形が一つの資料に共存することから、ほかの文字の字形変化と合わせて考えることが望ましいと述べており、カロシュティー文字では新旧の文字は共存しうることがわかる。アルファベットのような表音文字であり、表意文字の漢字と同一視はできず、また前3世紀から後3世紀という比較的長い期間を対象に、年代がわかる紀年銘資料から編年を構築しており、方法論をそのまま参照することは難しいが、少なくとも複数文字のセット関係から時期の指標としなければならないなど、示唆に富む。

いずれの研究も文字を形状（主に字形）に基づいて分類し、型式学的な研究をおこなう方法は共通している。しかし、字形から何を見出すかは論者によって差がある。例えば、カロシュティー文字は画数の少ない単純な形態で、書き癖の抽出までは難しいと考えられ、内記は工人差に一切ふれていない。漢字のような象形文字は同じ文字でも表記にゆれがあるため、書き癖をもって字形の型式設定が可能となり、そのほかの特徴を組み合わせることで工人や工房の同定に用いられている。

## (2) 字形の検討と他鏡式の影響

両系統の字形差 まず基礎的な作業として、前章で仮定し、考古学的に別系統と判断した Sc・Pb 系統が字形から見ても異なることを確かめておきたい。

両系統で共通し、比較できる文字は限られるが、例えば起句の「吾作明竟」において、「吾」と「作」が異なる字形をとっている (図 8)。「吾」の Sc 系統は上の「五」を半円二つの弧線が接する砂時計のように表すが、Pb 系統は一筆書きで書くものと、X 字形に近い







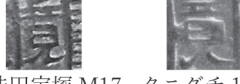

	Sc 系統	Pb 系統
吾	 大同江面 1314 タニグチ 1号	 安満宮山 金毘羅山
作	 巖窟 2下-1	 造山 3号
明	 大同江面 1313 庚申塚	 弁天山 C1号 金毘羅山
竟	 佐味田宝塚 M17 タニグチ 1号	 安満宮山

図8 Sc 系統と Pb 系統の字形比較













幽	  大同江面 1313 タニグチ 1号	道	  大同江面 1313 伝木ノ子町
凍 / 練	  大同江面 1313 タニグチ 1号	萬	  大同江面 1314 伝木ノ子町
統	  小平沢 タニグチ 1号	子	  免ヶ平第2主体 朝日谷2号

図9 Sc系統の字形比較

ものの2種類ある。Sc系統の「作」は右の「乍」をE字形の上に1条の短い縦線をおくが、Pb系統はEの縦画が上に突き出し、2条の縦線が伸びる。「明」「竟」は「吾」「作」ほど顕著ではないものの、「明」の「月」の払いが左斜め下か真下か、「竟」の最終画をはねるか払うかなど、Sc・Pb系統それぞれに対応して若干の違いが見える。

やはり、字形の面からも二つの系統差を認めうる。断面形状などの考古学的な情報も踏まえると、この系統差は異なる工人・工房によって製作された結果と認めてよいだろう。

**Sc系統の字形** Sc系統の字形を詳しく見てみたい。実例は少ないが、Sc・Pb系統の比較で示したタニグチ1号墳出土鏡らがSc系統内でも異なる字形をもっている。銘文型式の検討で示した一群の1面であり、字形からもSc系統を細分できる可能性が見えてきた。

この一群の文字を詳しく見てみたい(図9)。まず字形の差で目につくのが、文字の画を直角に折りたたむ例である。「道」「萬」に多く「徳」「兮」でもわずかに確認できる。これはもともと、半円方形帯をもつ神獸鏡の方形に合わせて文字を変形したデザインに由来すると考えられ、長い帯状の銘帯をもつ斜縁神獸鏡では不要である。次に「幽」、「統」、「子」の字形を比較すると、「幽」は「么」を単純な雷マークのように書くが、本群は菱形を二つ連結する。「子」はわかりやすく、上に逆三角を配すが、本群は四角もしくは隅丸方形を置き、下部も十字形を装飾的に配す。「統」はかつて「競」と読まれてきた経緯をもち、偏と旁が一体になっている字形がほとんどである。しかし、タニグチ1号墳と古市方形墳は明確に糸偏を意識した字形をとっている。字体にも差があり、「凍」を「練」と表記する。

以上のように、銘文と表現で予想されたSc系統内の特徴の一致するグループは、字形から見てもまとまりをもつ。

**特異なSc系統** 考古学的検討と文字の検討をふまえると、タニグチ1号墳出土鏡をはじめとする一群は脇侍の数と表現、神像の表現、字形の特徴が対応し、Sc系統のなかでもグルーピングできる可能性が高まった。この特徴のいずれかが該当する資料は、表1の古市方形墳から石槌山1号墳第1主体に相当する。

このグループは古いとみなされている上方作系獸帯鏡との共通点が多く、同じ徐州系であるこ

ともふまえると影響関係を想定できる。例えば朝日谷2号墳出土鏡を見ると、天鹿や片足を突き出す仙人の表現が共通している。また、神像の「山」字形の表現は三段式神仙鏡や華西系・徐州系画紋帯神獸鏡の一部に見える。方形に合わせた字形と合わせて、神獸鏡の影響を直接示す特徴といえるだろう。つまり、二つのグループには新旧の時期差があると考えられる。したがって、以降はこの一群を「Sc系統古段階」(図2-1・2)、それ以外の製品を「Sc系統新段階」(図2-3・4)と呼称する。特徴句である「功成事見」をふまえると、この「吾作」の実態が図7に示した「翟氏」や「至氏」である可能性も浮上するが、字形は一致せず、図像の表現も異なることから、このグループを「翟氏」「至氏」の製品とはみなさない。

「幽凍三岡」 上野によって、環状乳神獸鏡のなかにも複数の系統が存在し、日本列島から出土する製品は華北東部系(徐州系)が多数を占めると示された[上野2001]。環状乳など神獸鏡の内区紋様を問わず、銘文Sの第二句「幽凍三商」は末字に「商」を置くことが通例である。しかしながら、徐州系の環状乳・同向式神獸鏡を見ると「幽凍三岡」と末字を「岡」にしており、神獸鏡全体で見れば異質な特徴を備える。徐州系画紋帯同向式神獸鏡の優品であるホケノ山古墳出土鏡は「幽凍三岡(もしくは剛)」としており、環状乳・同向式を問わず徐州系神獸鏡の特徴といえる。なお、華西系獸首鏡は「幽凍三岡」の句をもち、徐州と華西(四川)の影響関係を見ることができ。

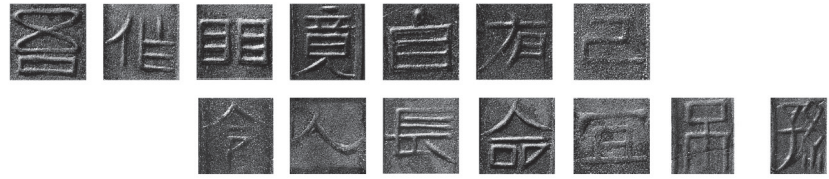
一方、斜縁神獸鏡のSc系統は「幽凍三商」としているため、徐州系画紋帯神獸鏡とはやや様相が異なる。これまで、銘文の開始位置や神獸表現などから斜縁神獸鏡と画紋帯同向式神獸鏡の共通性が見いだされてきたが、異なる部分も存在するようである。近い関係ではあるものの、同じ工人による製品とは考え難い。

銘文 Pb と求心式神獸鏡 次に斜縁神獸鏡の銘文 Pb を検討したい。同じ銘文を求心式神獸鏡も採用しているため、二つの鏡式を合わせて検討したい。求心式神獸鏡は総数20面弱のごく少数の鏡ではあるが、三角縁神獸鏡が大量に出土したことで知られる奈良黒塚古墳の棺内に唯一置かれていた鏡がこの鏡式であり、奈良ホケノ山古墳からも細片が出土している。

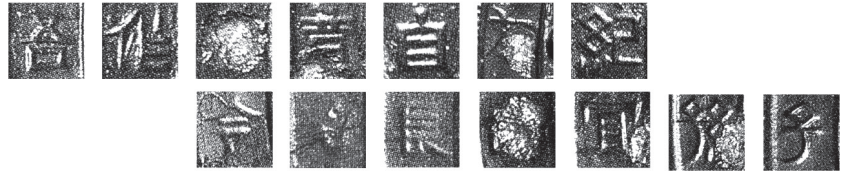
字形を比較すると(図10)、いずれも特徴的な印象を受けるが、中でも二つの鏡式に顕著なものが「作」「自」「人」「有」「命」である。「作」は先に述べた縦画が目立つ。「自」は「目」の上の払いを珠点で表す。「人」は交点が極端に左上にあり、本来払いである2画目をはねる。「有」は「人」と同様に「ナ」の交点を極端に左上に置き、上に飛び出した線を左斜め上に曲げる。「ナ」「月」の払いをはっきり書く。「命」は「日」を三角形で表す。これらの字形は、ほかの鏡の同字と比べてみても、斜縁神獸鏡と求心式神獸鏡がもつ銘文 Pb に共通する字形の特徴といえる。こうした字形(書き癖)は共通しているものの、「吾」「子」などの字形は Pb 系統の中にも差が存在しており、複数の工人がいたと考えられる。一方で、鳥根造山3号墳出土斜縁神獸鏡と鄂州市西山鉄砵出土求心式神獸鏡は、鏡式が異なるにもかかわらず、ほとんどの字形が酷似しており同工品と疑うほどである。

断面形状も比べてみたい。求心式神獸鏡の鈕形状を見てみると(図11)、ボタン型の扁平な鈕を採用する点は Pd 系統と共通するが、鈕頂の平坦面が広く違いも認められる。この違いが何に起因するかわからないが、斜縁神獸鏡 Pb 系統と求心式神獸鏡は字形と鈕形状に共通点をもつ。

大阪安満宮山古墳  
斜縁神獣鏡



島根造山3号墳  
斜縁神獣鏡



湖北鄂州西山鉄砦  
求心式神獣鏡

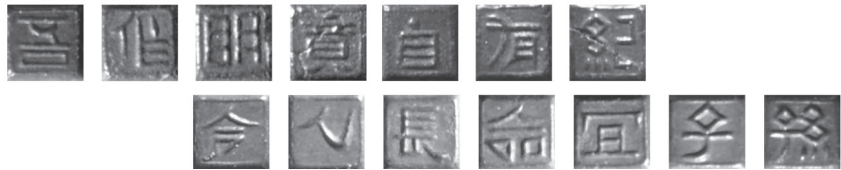


図10 銘文 Pb の字形

なお、求心式神獣鏡は内区紋様の崩れや半截菱雲紋から新しい時期に位置付けられることの多い鏡式であり、製作時期を魏代まで下げる考えもある [上野 2008 など]。一方で斜縁神獣鏡 Pb 系統は神獣表現が Sc 系よりも優れており、村松洋介の編年でも古く位置付けられている [村松 2004]。この製作系統が前半に斜縁神獣鏡 Pb 系統、後半に求心式神獣鏡を製作していた可能性が想定できるのではないかと。求心式神獣鏡には年代差や系統差を反映していると考えられる精粗の差があり [黒田 2008]、その製作には時間幅が見込まれる。古い製品は Pb 系統の製作時期に近接するのではないだろうか。



図11 求心式神獣鏡と断面形状 (S=1/2)  
(上: 石切神社蔵 下: 白水瓢塚古墳 2面は同型)

特徴的な「人」の字形であるが、斜縁神獣鏡が製作されるにあたって突然出現したわけではない。盤龍鏡や画像鏡を見ると「人」は第一画を極端に短くし、第二画をまっすぐ右に伸ばし、上下が極端に狭いものが多い。おそらく銘帯の省スペースのためと考えられ、後漢鏡に見える字形の特徴の一つといえよう。斜縁神獣鏡・求心式神獣鏡 Pb に近い字形を探すと、一部の画像鏡は銘文に「令人」があり、最後の払いをはねるなど、似た字形が存在する。一方で盤龍鏡に多い「多賀国家人民息」や袁氏作系画像鏡の「上有山人・・・」を見ると、縦長の「人」に近いものも多く、これらの鏡群とは関係が薄いことも予測できる。

上方作系獸帯鏡と斜縁神獸鏡 Pb 系統と求心式神獸鏡の関連性を述べ、相対的に新しく位置づけられる可能性にふれた。反対に、古いと考えられている上方作系獸帯鏡との関連も見ておきたい。上方作系獸帯鏡と斜縁神獸鏡の関係の深さは既に指摘されているが〔実盛 2015〕、ここでは字形の視点からよりミクロに見ていきたい。

銘文 Pb をもつ上方作系獸帯鏡が鳥取桂見 2 号墳から出土しており、銘文の字形・外区の複線波紋・鈕座の有節重弧紋が斜縁神獸鏡 Pb 系統と共通している（図 12）。よく似た字形をとるものは、比較的近くの地域である島根造山 1 号墳から斜縁神獸鏡が出土していることも注目される。桂見 2 号墳出土鏡は上方作系獸帯鏡の中でも精緻な紋様をもち、古く位置づけられることが多い。この鏡のもつ重要な問題は、字形の類似を重視すると、斜縁神獸鏡 Pb 系統の一部を介して、漢鏡 7 期でも早い段階の上方作系獸帯鏡と魏代に下る可能性をもつ求心式神獸鏡が接近してしまう。もちろん、それぞれの鏡式の製作には時期幅が存在し、ある程度の重複期間をもつと考えられるが、上方作系獸帯鏡の製作時期はこれまでの想定よりも、時期が下がるか長期に及ぶと考えている。ただし、上方作系獸帯鏡の中で銘文 Pb は 2 例に限られ、位置づけには注意しておきたい。

なお、検討から除外した銘文 Pd をもつ斜縁神獸鏡だが、銘文 Pb と同じ七言句を採用するため、これまでの検討をふまえると Sc 系統よりも Pb 系統に近い由来をもつだろう。奈良新沢 213 号墳出土鏡は上方作系獸帯鏡の長野弘法山古墳・京都百々池古墳出土鏡らと字形が類似している。字形だけではなく、弘法山古墳出土鏡などは上方作系獸帯鏡の中でも画像鏡の影響が深いと考えられてきた表現型式が設定されており〔山田 2006〕、上方作系獸帯鏡の中でも異例である。銘文 Pd をもつ斜縁神獸鏡と上方作系獸帯鏡に特徴が共通するものの存在にはふれておきたい。

小結 文字の字形に着目し検討を進めた結果、本章で得られた大きな成果が二つある。一つ目は、Sc 系統のうち異なる字形をもつ一群は Sc 系統の中でも古く位置づけられる。二つ目は、銘文 Pb を共有する斜縁神獸鏡と画紋帯求心式神獸鏡は同系統の製品に位置づけられる。他鏡式と比較することで斜縁神獸鏡にある各グループの相対的な位置づけも見えてきた。鏡に銘文がある場合、断面形状や紋様と合わせて字形を重要な属性とみなすべきだろう。

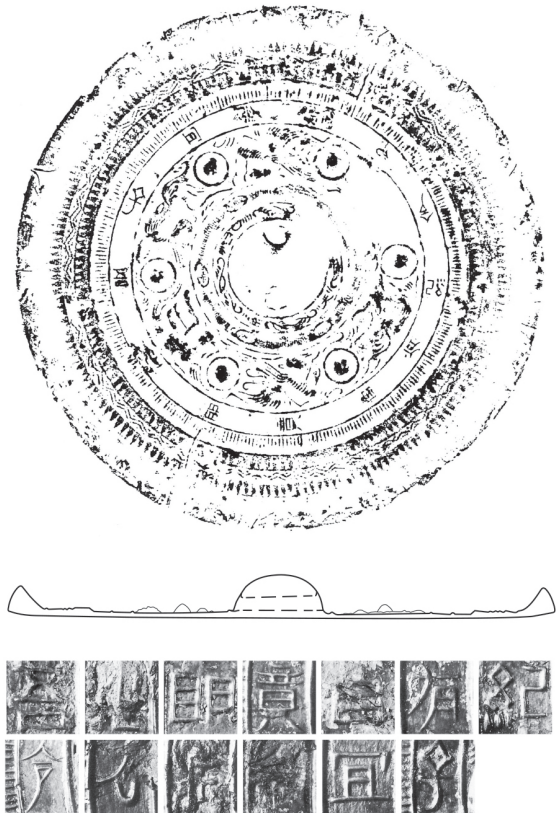


図 12 桂見 2 号墳出土鏡と字形（縮尺不同）

## 四 斜縁神獸鏡の系譜

### (1) 考古学的研究と字形分析から

斜縁神獸鏡には Sc 系統と Pb 系統の二つの系統が存在すると仮定し、断面などの特徴を考古学的に検討し、異なる出自をもつ製作者集団の差が製品にも表れたと推察した。そこに文字の検討を加えることで、2 系統は字形の異なる文字を用い、製作主体の違いに起因する蓋然性をさらに高めた。

銘文の語句・字形と神像表現に着目することで、Sc 系統の中にも年代差が見えた。Sc 系統のうち半円方形帯をもつ神獸鏡の影響が特に強い一群があり、それらは上方作系獸帯鏡の影響も少なからず見えることから、古く位置づけられると考えた。一方で、Pb 系統は銘文型式・字形・鈕の形状から求心式神獸鏡と密接な関係にあると考えた。求心式神獸鏡は新しく位置づけられることの多い鏡で、Pb 系統の製作年代も接近する可能性はあるが、Pb 系統も同様にして上方作系獸帯鏡と関係をもつ。

Sc 系統と Pb 系統の違いを強調したため、2 系統の併行関係を検討することは難しい。現状では Sc 系統古段階を新しく位置づける理由は見当たらない。Sc 系統古段階や Pb 系統は縁の厚さや形態に違いはあるものの、外区の内側が厚みを増して外区全体で匙縁を呈することは少ない。ただし、Sc 系統新段階や Pb 系統でも銘文 S 短をもつものは外区の内側がやや突出する傾向があり、両系統を横断して変化する時期差を示す要素となりうる可能性がある。

### (2) 後漢鏡か、魏鏡か？

**魏鏡の特徴** これまで後漢鏡との比較を中心におこなってきた。斜縁神獸鏡の製作時期が魏代まで下る可能性も想定されており、現状で魏代に作られた鏡がもつ特徴をまとめておきたい。

まず、福永伸哉による長方形鈕孔が挙げられる [福永 1991 など]。魏の紀年鏡をはじめとして魏鏡の大きな特徴であることは疑いない。鏡背を分けるような范傷や崩れた紋様などの鑄造欠陥が目立ち、近年では、縁や紋様の平滑面に波打ったり面を作ったりする荒い研磨を施すことが指摘されている [岩本 2020・南 2019]。後漢鏡と比較して粗雑な造りといえる。銘文にも変化があり、「青同之竟」などの語句をもつことが明らかにされている [「中国古鏡の研究」班 2011b]。三角縁神獸鏡を除くと、方格規矩鏡（鳥紋鏡）・獸首鏡・双頭龍紋鏡など平彫・線彫を用いた平滑な鏡式がほとんどである。後漢鏡を復古させ、新たな鏡式が生み出されないことも特徴であろう。

注意しておきたいのは、これらの研究は「青龍三年」銘方格規矩四神鏡をはじめとして、235 年以降に製作された魏鏡をもとにした議論の展開である。魏墓出土鏡が明確でないまま、220 年～235 年に製作された魏初期の製品は後漢鏡からの型式変化による類推に頼らざるをえない。

近年では三角縁神獸鏡の研究が進展し、初期の三角縁神獸鏡の具体像が明らかにされている。三角縁神獸鏡の初期の製品、いわゆる 238 年前後の銘文をもつ紀年鏡であるが、画紋帯同向式神獸鏡や盤龍鏡を手本にしており斜縁神獸鏡ではない。一方で、上方作系獸帯鏡と斜縁神獸鏡がもつ外周突線は継承されており、三角縁神獸鏡に徐州系鏡群が影響を与えたことは確実視されているが、福永自身が指摘するように長方形鈕孔は採用されない [福永 2005]。

**斜縁神獸鏡と後漢鏡・魏鏡** 最後に斜縁神獸鏡の特徴と時期について後漢鏡か魏鏡かの観点から整理しておきたい。



後漢鏡に近い要素は、画紋帯同向式神獸鏡と神獸表現・銘文の開始位置との共通性が挙げられる [森下 2011]。Sc 系統古段階や Pb 系統は上方作系獸帯鏡と共通する特徴がある。

魏鏡に近い要素は外周突線や同範（同型）鏡の存在である [徳田ほか 2012]。ただし、同範（同型）鏡は大阪津堂城山古墳と香川岩崎山 4 号墳出土の 1 組 2 面に限られ、全てが同様の技法を用いて製作されたわけではない。三角縁神獸鏡の同範鏡、南朝の同型鏡のような量産方法は採用していなかったようである。Pb 系統は求心式神獸鏡との関係性も挙げられる。なお、鏡自体の特徴ではないが、斜縁神獸鏡は日本列島の弥生時代の遺跡から出土していないことも時期が下の根拠に挙げられている。

こうした二元論的な考え方ではなく、そもそもどちらにも属さないという可能性も提起されている。実盛良彦は斜縁神獸鏡を「後漢鏡でも魏鏡でもない」として、魏代と並行する時期に公孫氏政権下で地方生産されたと解釈する [実盛 2012]。これは実盛の編年案では製作時期が魏代に及ぶものの、魏鏡に特徴的な長方形鈕孔を持っていないことを大きな根拠にしている。当否は判断しかねるが、斜縁神獸鏡と魏鏡とでは異なる点が多いことも事実である。

斜縁神獸鏡の製作技術や銘文は後漢鏡の範疇におさまると考えるが、魏代に作られた鏡と共通点もある。したがって、現在の研究状況では、製作時期は後漢末（徐州系画紋帯同向式神獸鏡並行・190 年以降か）～魏初頭（240 年以前）に位置づけておくのが穏当と考える。「面数が少なく、短期間に生産された」とも考えられており [村松 2004]、想定した時期幅はより短期間になる可能性もある。製作時期・地域をふまえると公孫氏勢力圏で製作されたという仮説も成り立つが、他鏡式の影響が認められる以上、地方で独立した製作体制をとっていたとは考え難い。鏡工人の移動や情報の共有など、工人どうしの交流は継続されたと推測する。193 年には曹操によって徐州征伐がおこなわれ、遺体が泗水の流れを止めるほどであったと『三国志』に記録されている。こうした時代背景をふまえると、華北東部でも北よりの地域で製作された可能性も浮上しよう。

## おわりに

斜縁神獸鏡を対象にしたが、文字を対象にした結果、他鏡式もあつかうこととなり、比較検討した鏡を含めると広い範囲に議論が及んだ。三角縁神獸鏡との関連でとりあげられることの多かった鏡だが、与えた影響は限定的で、両者の違いを強調する結果となった。しかし、製作時期や技術をふまえると後漢と魏をつなぐ重要な鏡であることも確かである。

徐州系鏡群は大陸での正式な発掘調査報告が少なく、出土したとしても副葬品が貧弱で、規模も小さな後漢墓が多い。製作時期をピンポイントで示す紀年鏡も存在しない。そのため出土遺構の時期による検討の裏付けという、考古学では欠かせない方法論をとりづらい。製作時期を決めるハードルは高いが、古墳時代の始まりともかかわる鏡である。迂遠な作業ではあるが、鏡式どうしの前後関係を見据え、相対的に位置づけていくのが堅実な方法と考える。本稿は斜縁神獸鏡を検討し、上方作系獸帯鏡や求心式神獸鏡などの他鏡式と比較した。これらの鏡式にも銘文型式や神獸表現に違いがあり、製作系統や時期差に対応している可能性がある。今後も検討を続けていきたい。

## 注

- (1) 鏡式名に斜縁をもつものは、ほかに斜縁四獣鏡と斜縁同向式神獣鏡がある。斜縁四獣鏡は内区を獣像に統一したもので、斜縁同向式神獣鏡は神獣像を一方向から見るように配置する。本稿では斜縁神獣鏡を対象にしており、参照に留めた。なお、斜縁同向式神獣鏡は画像鏡に近い特徴を備えており、斜縁神獣鏡との共通点は少ない[馬淵 2015]。
- (2) 銘文の型式は林裕己の分類に従う[林 2006]。Pd 第一句末のみ、斜縁神獣鏡では「道」に限定されるので改めた。  
Sc: 吾作明竟 幽涑三商 統徳序道 配像萬疆 曾年益寿 子孫番昌(宜孫子)  
Pb: 尚方作竟自有紀 辟(除) 去不羊宜古市 上有東王父西王母 令君陽遂多孫子(令人長命不知老)  
Pd: 某氏作竟自有道 青龍白虎居左右・・・
- (3) 漢鏡 7 期の鏡式は次の通り[岡村 1999 ほか]。1 段階: 上方作系獸帶鏡、飛禽鏡、画像鏡など、2 段階: 画紋帶神獣鏡、3 段階: 斜縁神獣鏡。
- (4) 当時の論文では「筆跡」と安易に用いてしまったが、本稿を執筆するにあたり、文字研究を調べることで、以前使用した「筆跡」は大西の定義する「字形」に相当すると判断した。ここで改めておきたい。
- (5) なお、鈴木や内記の研究を参照すると、各分野における主に外国人研究者による文字の先行研究が挙げられており、海外では文字研究が盛んと考えられるが、今回はそこまで参照できなかったことを付記しておきたい。
- (6) 長野中山 36 号墳からも出土しているが、鏝などの要因で判読できない文字が多い。字形と紋様は桂見 2 号墳出土鏡と大きく異なる。

## 参考文献

- 雨宮健祥 2019 「三角縁神獣鏡の銘文字形分析—編年と製作工人—」『東京大学考古学研究室紀要』第 32 号
- 岩本 崇 2020 『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 魚住和晃 2007 『筆跡鑑定ハンドブック』三省堂
- 上野祥史 2001 「神獣鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』第 83 巻第 4 号
- 上野祥史 2006 「画像鏡の模倣について—図像分析の立場から—」『原始絵画の研究』論考編、六一書房
- 上野祥史 2008 「ホケノ山古墳と画文帯神獣鏡」『ホケノ山古墳の研究』榎原考古学研究所研究成果第 10 冊、奈良県立榎原考古学研究所
- 大西克也 2009 「漢字の誕生—骨と甲羅に刻まれた文字—」『アジアと漢字文化』放送大学教育振興会
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』第 67 巻第 5 号
- 岡村秀典 1999 『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
- 岡村秀典 2017 『鏡が語る古代史』岩波書店
- 加藤一郎 2015 「宮内庁書陵部所蔵の千足古墳および榊山古墳出土鏡の位置づけとその意義」『千足古墳—第 1 次～第 4 次発掘調査報告書—』岡山市教育委員会
- 黒田恭正 2008 「画紋帯同向式系神獣鏡について」『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 崎川 隆 2002 「書体分析による甲骨文字契刻者組織の復元」『史学』第 71 巻 2・3 号
- 鈴木 舞 2015a 「殷金文の字体と工房—殷墟花東 54 号墓「長」字銘の検討—」『中国出土資料研究』第 19 号
- 鈴木 舞 2015b 「殷代青銅武器とその銘文—字体・字形からの検討—」『東京大学考古学研究室紀要』第 29 号 (2015a・b とともに鈴木舞 2017 『殷代青銅器の生産体制—青銅器と銘文の製作からみる工房分業—』六一書房に再録)

- 内記 理 2020 「年代判定の一指標としてのカロシュティー文字の形態」『西南アジア研究』No.90
- 実盛良彦 2009 「斜縁神獣鏡の変遷と系譜」『帝釈遺跡発掘調査室年報』XXIII、広島大学考古学研究室紀要第1号
- 実盛良彦 2012 「斜縁神獣鏡・斜縁四獣鏡の製作」『考古学研究』第59巻第3号
- 実盛良彦 2015 「上方作系浮彫式獣帯鏡と四乳飛禽鏡の製作と意義」『FUSUS』VOL.7
- 「中国古鏡の研究」班 2011a 「後漢鏡銘集釋」『東方学報』京都第86冊
- 「中国古鏡の研究」班 2011b 「三国西晋鏡銘集釋」『東方学報』京都第86冊
- 徳田誠志ほか 2012 「三次元計測データを用いた斜縁神獣鏡「同型鏡」の検討—大阪府津堂城山古墳・香川県岩崎山4号墳出土鏡の場合—」『第29回日本文化財科学界発表要旨集』
- 富岡謙蔵 1920 『古鏡の研究』丸善
- 林 裕己 2006 「漢鏡銘について（漢鏡銘分類概論）—樋口分類補正試論—」『古文化談叢』第55集、九州古文化研究会
- 樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社
- 福永伸哉 1991 「三角縁神獣鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻第1号
- 福永伸哉 2005 『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 馬淵一輝 2015 「斜縁同向式神獣鏡の系譜」『森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』同志社大学考古学シリーズXI
- 馬淵一輝 2019 「華北東部の銅鏡をめぐる諸問題」『銅鏡から読み解く2～4世紀の東アジア 三角縁神獣鏡と関連鏡群の諸問題』アジア遊学237、勉誠出版
- 南健太郎 2019 『東アジアの銅鏡と弥生社会』同成社
- 村瀬 陸 2016 「漢末三国期における画文帯神獣鏡生産の再編成」『ヒストリア』257号
- 村松洋介 2004 「斜縁神獣鏡研究の新視点」『古墳文化』創刊号、國學院大學古墳時代研究会
- 森下章司 2011 「漢末・三国西晋鏡の展開」『東方学報』、京都第86冊
- 山田俊輔 2006 「上方作系浮彫式獣帯鏡の基礎的研究」『會津八一記念博物館研究紀要』第7号

## 報告書・図録等

- |            |  |
|------------|--|
| 山梨小平沢古墳    | 山梨県編 1998『山梨県史』資料編2原始・古代2                            |
| 長野弘法山古墳    | 斎藤忠編 1978『弘法山古墳』松本市教育委員会                             |
| 静岡庚申塚古墳    | 大村至広ほか 2011『庚申塚古墳発掘調査報告書』磐田市教育委員会                    |
| 滋賀安養寺大塚越古墳 | 京都大学総合博物館編 1997『王者の武装—5世紀の金工技術—』                     |
| 滋賀安養寺山ノ上古墳 | 西田弘 1961「その他の古墳」『滋賀県史跡調査報告』第12冊                      |
| 京都百々池古墳    | 梅原末治 1920「川岡村岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊                  |
| 京都稲荷山三ノ峯   | 高橋美久二 1987『鏡と古墳—景初四年鏡と芝ヶ原古墳—』京都府立山城郷土資料館・京都府立丹後郷土資料館 |
| 伝長岡近郊      | 梅原末治 1955「附 乙訓郡西南部発見の古墳遺物」『京都府文化財調査報告』第21冊           |
| 京都金毘羅古墳    | 古川匠編 2021『金毘羅山古墳発掘調査報告書』京都府教育委員会                     |
| 大阪弁天山C1号墳  | 原口正三・西谷正 1967『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17輯、大阪府教育委員会      |
| 大阪安満宮山古墳   | 鐘ヶ江一朗編 2000『安満宮山古墳』高槻市教育委員会                          |

大阪国分ヌク谷北古墳	藤直幹・井上薫・北野耕平編 1964『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究報告第1冊
大阪津堂城山古墳	山田幸弘編 2013『津堂城山古墳』古市古墳群の調査研究報告IV、藤井寺市文化財報告第33集
大阪和泉黄金塚古墳	末永雅雄・嶋田暁・森浩一編 1954『和泉黄金塚古墳』綜藝舎
兵庫へボン塚古墳	梅原末治 1925「武庫郡本山村マンバイのへボン塚古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯
兵庫松田山古墳	兵庫県史編纂委員会編 1992『兵庫県史』考古資料編
奈良古市方形墳	伊達宗康 1968「古市方形墳」『奈良市史』考古編
奈良斑鳩大塚古墳	北野耕平 1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第10輯、奈良県教育委員会
奈良黒塚古墳	奈良県立橿原考古学研究所編 2018『黒塚古墳の研究』八木書店
奈良ホケノ山古墳	岡林孝作・水野敏典 2008『ホケノ山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所研究成果第10冊
奈良新沢 213 号墳	伊達宗康編『新沢千塚古墳群』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第39冊
奈良佐味田宝塚古墳	梅原末治 1921『佐味田及新山古墳研究』岩波書店
奈良タニグチ 1 号墳	河上邦彦・西藤清秀編 1996『タニグチ古墳群(付タニグチ墳墓群)』高取町文化財調査報告書第17冊
鳥取桂見 2 号墳	船井武彦ほか編 1984『桂見墳墓群』鳥取市文化財調査報告書 18
鳥根造山 3 号墳	山本清 1967『造山 3 号墳調査報告』鳥根県教育委員会
岡山伝木之子町	樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
広島中小田 1 号墳	潮見浩編 1980『中小田古墳群—広島県高陽町所在—』広島市教育委員会・広島大学文学部考古学研究室
徳島天河別神社 4 号墳	森清治編 2011『天河別神社古墳群発掘調査報告書』鳴門市教育委員会文化財調査報告書 7
香川岩崎山 4 号墳	古瀬清秀編 2002『岩崎山 4 号墳発掘調査報告書』津田町教育委員会
愛媛朝日谷 2 号墳	梅木謙一編 1998『朝日谷 2 号墳』松山市文化財調査報告書第 63 集
福岡五島山古墳	赤坂享 2014「五島山古墳出土資料の再検討」『福岡市博物館研究紀要』第 24 号
伝筑前	梅原末治 1923『梅仙居蔵日本出土漢式鏡図集』山川七左衛門
大分免ヶ平古墳	小田富士夫・真野和夫 1986『免ヶ平古墳発掘報告書』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要III
石切神社	石切剣箭神社編 2015『図録 石切剣箭神社 御神宝』
五島美術館 M302	樋口隆康 1979『古鏡』新潮社
大同江面	関野貞ほか 1925『楽浪郡時代の遺蹟』古蹟調査特別報告第四冊
伝楽浪(京博蔵)	同上
鄂州西山鉄砮	鄂州市博物館 2002『鄂州銅鏡』中国文学出版社
巖窟	梁上椿 1940~1941『巖窟蔵鏡』
小校	劉體智 1935『小校経閣金文拓本』

## 図版出典

- 図1 左：大村 2011 右：原口・西谷 1967
- 図2 1：梅木編 1998 2：磐田市教育委員会蔵 3・5：大分県立宇佐風土記の丘蔵 4：山梨県立考古博物館蔵 6：徳島県立博物館蔵（2～6はいずれも筆者撮影）
- 図3 筆者作図
- 図4 1：筆者撮影 2：河上・西藤編 1996
- 図5 安満宮山・金毘羅山のみ鐘ヶ江編 2000・古川編 2021 をトレース、それ以外は筆者作図
- 図6 広島大学文学部考古学研究室蔵（筆者撮影・作図）
- 図7 1：京都国立博物館蔵 2：鄂州市博物館蔵（ともに筆者撮影）
- 図8 大同江面：関野ほか 1925 タニグチ 1号：河上・西藤編 1996 巖窟 2下-1：梁 1940～1941 庚申塚：筆者撮影 佐味田宝塚：樋口 1979 安満宮山：鐘ヶ江編 2000 金毘羅山：古川編 2021 造山 3号：車崎正彦編 2002『考古資料大観』鏡 5 小学館 弁天山 C1号：原口・西谷 1967
- 図9 大同江面：関野ほか 1925 タニグチ 1号：河上・西藤編 1996 小平沢：筆者撮影 伝木之子町：樋口 1979 免ヶ平第 2 主体：筆者撮影 朝日谷 2号：梅木編 1998
- 図10 安満宮山：鐘ヶ江編 2000 造山 3号：車崎編 2002 鄂州西山：筆者撮影
- 図11 安田滋編 2008『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』を引用・一部トレース改変
- 図12 船井ほか編 1984 を引用・一部トレース改変
- 表1・2 筆者作成

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、飯田市美術博物館、磐田市教育委員会、大分県立博物館宇佐風土記の丘、京都国立博物館、京都大学総合博物館、宮内庁書陵部、さぬき市歴史民俗資料館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、徳島県立博物館、広島大学文学部考古学研究室、松本市考古博物館、山梨県立考古博物館に資料調査の便宜を得た。また、北山大照、鈴木舞に資料提供をうけた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

## 付記

本稿脱稿後、集成の遺漏に気づいた。静嘉堂文庫美術館編 2021『旅立ちの美術』No.30の資料が該当する。面径 16.8cm で、銘文に「吾作明竟 幽涑三商 大吉 長亘子孫 君亘高官 位至公卿」と記す。ほかの属性も加味すると Pb 系統に該当する。これまで存在が知られていなかった資料のため、ここで明記しておきたい。